

学齢期ASD児童へのDIR/フロアタイムアプローチ：オルタナティブ教育の視点から

DIR/フロアタイムの理論と学齢期ASD児童への適用

DIR（Developmental, Individual-differences, Relationship-based）は発達、個人差、関係性に基づくモデルであり、乳幼児から成人まで一貫して人間の社会情緒的発達を支えることを目指します^{① ②}。このモデルは「**発達段階**」（その子が今どの発達段階にあり何を指すか）、「**個人差**」（感覚や運動、言語など各自が世界を受け取り反応する独自の特性）、「**関係性**」（人との情緒的なつながりが発達を促す原動力）という3要素で子どもを理解し^{③ ④}、スキルや行動の断片的な矯正ではなく**社会性・感情面の土台から全人的な成長**を促すことを重視します^⑤。このDIRモデルを実践する方法論が「**フロアタイム（Floortime）**」であり、特に自閉スペクトラム症（ASD）の子どもたちの支援に広く用いられています^⑥。

フロアタイムでは**大人が子どもの発達レベルまで降りて一緒に遊び、興味を共有する中で対話の輪を広げていきます**^⑦。文字通り床に座って子どもと遊ぶことから名付けられたこのアプローチでは、子どもの関心に大人が寄り添い、その**好きな遊びや活動に参加しながら対話ややり取りを引き出します**^{⑦ ⑧}。例えば子どもが車のおもちゃの車輪を回して遊んでいるなら、大人も隣で同じように車輪を回し、子どもの視線や感情に共鳴します^⑧。こうした**子ども主導のやり取り**によって情緒的なつながりを築き、徐々に社会的な相互交流のスキルを発達させていくのです^⑨。

このアプローチは、「**発達の6つの里程碑**」（Six Key Milestones）と呼ばれる目標を子どもが達成することを支援するよう設計されています^⑩。6つの里程碑とは、①自己調整と外界への興味、②情緒的な関係の深まり（他者との関わりへの積極性）、③二方向のコミュニケーション、④一連のやり取りによる複雑なコミュニケーション、⑤情緒的な思考（感情やアイデアの創造）、⑥論理的思考（感情と論理の統合）です^⑪。フロアタイムではこれらの能力を遊びの中で引き出し、「**コミュニケーションの円を開いて閉じる**」往復のやり取りを何度も経験させることで社会性と認知を育みます^⑫。例えば、単に言語や運動スキルだけを個別に訓練するのではなく、遊びの中でそれらを使った**情緒的なやり取り**を重ねることで結果的に言語・認知・運動面の発達も促していきます^⑬。

学齢期のASD児童に対するフロアタイムは、幼児期に比べてより発達した認知・社会性に合わせてアプローチが調整されます。幼児期では感覚遊びや基本的なやり取りから始めますが、学齢期になると**より独立した遊びへの参加**や認知的課題、問題解決スキルにも焦点が移ります^⑭。例えば、小学生くらいの子どもにはストーリーを一緒に作ったり、学習内容を子どもの興味に沿って情緒的な体験に結びつけるなど、年齢相応のテーマを取り入れつつ関係構築と問題解決力の伸長を図ります^⑭。フロアタイムの枠組み自体は年齢に関係なく適用可能で、思春期・成人期にもそれぞれの段階に応じた関わり方で**生涯にわたる発達支援モデル**として位置づけられています^{⑮ ⑯}。実際、創始者のスタンレー・グリーンズパン医師は自閉症支援＝幼児早期介入という固定観念を超え、「**発達は生涯続く**」という観点から**青年期や成人期のASD当事者にもフロアタイムは有効**であると述べています^⑰。このようにDIR/フロアタイムは、学齢期の児童にもその発達段階に応じて柔軟に適用できる包括的アプローチです。

近年、フロアタイムの有効性についての科学的エビデンスも蓄積されつつあります。過去10年ほどで複数のランダム化比較試験（RCT）が行われ、フロアタイム介入を受けたASD児童は伝統的な行動療法に比べ**対人関係やコミュニケーションで有意な改善**を示したとの報告があります^⑱。また保護者のストレス軽減効果も認められ、発達支援アプローチとしてエビデンスベースに基づく有効な方法と位置づけられ始めています^⑱。^⑲ 従来ABA療法（応用行動分析）のような行動面のデータ主導の手法と比べると、フロアタイムはエビデ

ンスが乏しいと批判された時期もありました¹⁹。しかし近年では包括的レビューでその有効性が支持され、発達のアプローチ全体の効果の高さが再評価されています²⁰。例えば2023年の系統的レビューでは「フロアタイムは完全に子ども主体のコスト効率の良い方法で、早期から導入すれば子どもの社会的・情緒的発達を向上させるのに有効である」と結論付けられています²¹。このように、DIR/フロアタイムは**ASD支援の「効果的かつ尊重的な代替手法」**として国際的にも認知が広まりつつあります²²²³。

学校教育現場でのDIR/フロアタイム実践例

フロアタイムは元々は家庭や療育現場で親子・療法士と子どもの一対一で行われることが多い手法ですが、その原理を**学校教育の場に取り入れる動き**も見られます。アメリカでは特に、包括教育（インクルーシブ教育）の潮流の中でフロアタイムが注目され、教師や支援スタッフが研修を受けて取り入れるケースが増えています²⁴²⁵。たとえば米国ICDL（発達と学習に関する国際評議会）は教育関係者向けに「学校でDIRを実践する方法」というコースを開設し、**教室でDIR/フロアタイムの原則を創造的に活用する方法**を教えています²⁶。この中では、「学習は教師が子どもの情緒的発達の土台（FEDCs）を支え、子どもが安心して共に調整できる関係性の中で尊重されている時にはじめて可能になる」とし、フロアタイムの理念を学校文化に取り入れる重要性が説かれています²⁷²⁸。

特別支援学校や専門機関での実践例：代表的な事例として、ニューヨーク市のレベッカ・スクール（Rebecca School）が挙げられます。レベッカ・スクールは3～21歳のASDや関連の発達障害の児童生徒を対象に**DIR/フロアタイムモデルのみを用いて教育を行う世界最大の学校**であり²⁹、創設にはグリーンスパン博士自身も関わりました³⁰。同校では全スタッフがフロアタイムのトレーニングを受け、教室の日課においても生徒一人ひとりの興味や感情表出に基づいたやり取りを重視しています³¹³²。例えば、教師が児童の遊びに入り込んで対話を広げたり、学習課題でも子どもの関心事を糸口に内容を構成するなど、カリキュラム全体にDIRの枠組みが組み込まれています³³³⁴。同様の理念を持つ学校は他にもニュージャージー州のCelebrate the Childrenスクールなど複数存在し、**「ABA中心の学校 vs DIR中心の学校」**として教育誌で比較紹介されることもあります（Time誌「A Tale of Two Schools」, 2006年）³⁵³⁶。これらの学校では、行動の矯正よりも**「関係の質が学習の土台」**という信念に基づき、情緒的に安心できる環境で発達段階に応じた学びを提供している点が共通しています³⁵³⁶。その結果、保護者からは「他の方法で伸びなかった子がDIRスクールでは生き生きと成長した」という報告も多く、ASD児童の新たな可能性を引き出す教育モデルとして評価されています³⁷²³。

通常学級・インクルーシブ教育での実践：フロアタイムのエッセンスは、特別支援の場だけでなく通常の学級運営にも応用可能です³⁸。インクルーシブ教育の先進校では、ASDなど特別なニーズを持つ児童が在籍するクラスで教師がフロアタイム的アプローチを取り入れている例があります。具体的には、**朝の会や自由時間に教師が子どもの好きな活動に参加して交流を深める**、教科学習の中でも課題をなるべく子どもの興味に関連付けて提示し**自発的な関わりを引き出す**、感情の起伏が激しい児童には一時的に個別のスペースで共に落ち着く関わり（フロアタイムの1対1セッションに近い形）を行う——といった工夫が報告されています。ポイントは、教師が**子どもの情緒的サインを読み取り共感しながら関係を構築すること**で、これにより子どもは安心感を持って学習活動に参加できるようになります³⁹⁴⁰。ある包括教育の現場では、フロアタイム研修を受けた教師が朝の登校直後に落ち着かないASD児童を迎える際、頭ごなしに注意するのではなく一緒に校庭を歩いたりジャンプしたりする（子どもの感覚ニーズに合わせた）関わりを数分行ったところ、その後の授業での集中が増したというケースもあります。これは**「どの子にも有効な個別化された情緒的サポート」**として他の児童にも波及効果があり、教室全体が落ち着いたとの証言もあります。実際、フロアタイムの手法は自閉症児だけでなく**クラスのすべての児童の社会情緒的スキル育成に貢献する**との指摘もあり³⁸⁴¹、対話的で包括的な学級づくりに寄与すると期待されています。

教育現場でフロアタイムを導入するためには、教師や支援員の研修・訓練が重要です。米国ではオンラインや対面でDIR/Floortimeの基礎コース（例：DIR101）から学校向け応用コースまで用意されており⁴²、**特別支援教育教師はもちろん一般の教師やセラピスト、保護者まで幅広い層が受講**しています²⁵。研修では「教室における遊び・感情・創造的思考の役割」や「児童それぞれの感覚プロフィールに合わせた指導法」など

が扱われ³²³⁵、受講者は**自分のクラスでDIR的アプローチを取り入れる具体策**を学びます。研修受講後、実際に教師らが実践報告を共有するコミュニティも存在し、「ある自閉症の子が授業中パニックになった際、叱責ではなく身体接触と言葉で共感的に寄り添ったところ早く落ち着きを取り戻し、その日の残りの授業に参加できた」などフロアタイム的対応の成功例が数多く報告されています。もっとも公教育の現場でこれを体系的に導入するには課題もあり、カリキュラム時間内に個別対応の時間を確保する工夫や、大人数学級での実践にはサポートスタッフの配置など環境整備も必要とされています。しかし全体としては、「**関係性と発達を中心に据えた教育**」というDIR/フロアタイムの考え方はオルタナティブ教育の一つの形態として徐々に学校現場に浸透しつつあります⁴¹。例えば2024年には日本の東京でも、レッジョ・エミリア教育とフロアタイムを組み合わせた新しいスクール創設の動きがあり⁴³、国境を越えて学校教育と発達療法の融合が模索されています。

オルタナティブ教育との共通点・相違点（モンテッソーリ、レッジョ・エミリア等）

DIR/フロアタイムは「発達段階に即した子ども主体のアプローチ」という点で、従来の伝統的教育法よりも**オルタナティブ教育（代替教育）**の理念に近いものがあります。モンテッソーリ教育やレッジョ・エミリア・アプローチといったオルタナティブ教育法との**共通点**として、以下のような点が挙げられます。

- ・**子ども主体・興味主導**: モンテッソーリもレッジョも子どもの自主性や興味を尊重する教育法です。フロアタイムでも常に子どもの関心に大人が歩調を合わせるため、子ども主導の原則が一致しています⁴⁴。実際、モンテッソーリ教師が子どもを観察しその興味に基づいて環境や課題を提供する姿勢は、フロアタイムで大人が子どもの興味に従って遊びを展開する姿勢と**極めて親和性が高い**と指摘されています⁴⁴。フロアタイムで言う「遊びにおける自発的な活動」は、モンテッソーリでいう「子どもの自主的な仕事（ワーク）」に通じるものだという見方もあります⁴⁴⁴⁵。
- ・**発達段階と個別化**: モンテッソーリ教育には発達の「敏感期」や年齢帯ごとの「発達のプラン（0-6歳、6-12歳…）」という概念があり、子どもが順序を追って発達課題を習得していくと考えます。フロアタイムも6つの情緒発達段階（FEDC）というモデルで順序だてて発達をとらえており¹¹、環境が適切であれば子どもはおおむねその段階を踏んで成長していくという点は共通しています⁴⁶。ただし、ASD児童の場合はその**発達の階段を上る過程に追加の支援や繰り返しの経験**が必要になることが多く⁴⁶⁴⁷、フロアタイムはまさにそうした子が各段階を十分経験できるよう関わりを持つ枠組みとして機能します⁴⁸。レッジョ・エミリアも「環境と子どもの相互作用」を重視し、子どもの現在の発達状態から次のステップへ導く教育を行います。従って**子どもの発達プロセスを丁寧に捉えた個別化**という点でもDIRとオルタナティブ教育は相通じています⁴⁹。
- ・**関係性・情緒の重視**: レッジョ・エミリア・アプローチは「教育は人と人との関係性の中で起こる」として教師と子、子ども同士、親と学校といったあらゆる関係の質を重視します。一方フロアタイムはまさに**情緒的な関係性を発達の原動力**と位置づけています⁵⁰。例えばレッジョでは共同探究プロジェクトを通じて子ども同士・教師との関わりを深めますが、フロアタイムでも大人と子の1対1の関係を起点に、そこに第三者（他児童やきょうだいなど）を徐々に交えていくことで社交範囲を広げていきます。どちらも**人との相互作用から学びや成長が生まれる**という信念を共有しており、これは従来型の一斉指導や行動矯正とは異なるオルタナティブな視点です⁵¹⁴⁰。

以上のような共通点から、モンテッソーリ教育者がフロアタイムを学んで特別なニーズの子に対応したり、レッジョの園でフロアタイム的アプローチを取り入れることは十分可能であり、実際にそれを実践している事例もあります。2024年には東京で「**フロアタイムとレッジョ・エミリアを統合したスクール**」の立ち上げ計画が進んでおり⁴³、異なるオルタナティブ教育の知見を組み合わせた新たな試みとして注目されています。

もっともDIR/フロアタイムとオルタナティブ教育との相違点や補完関係もあります。まず、フロアタイムは元来発達障害児の療育法として生まれた経緯があり、通常の教育課程というより個別セッション形式で用いられることが多い点がモンテッソーリやレッジョとは異なります。モンテッソーリ教室では子どもたちが自分で教材を選び自由に活動しますが、教師が一人の子にべったり付き添って遊ぶことは基本的にありません。それに対しフロアタイムでは**大人と子どもの密接な1対1の関わり**が中心であり、集団教育というよりは個別療法に近いスタイルです。ただしこれも考え次第で、モンテッソーリでも特定の子が困っているときは教師が1対1で介入しますし、レッジョでも小グループに教師が加わって対話する場面があります。従って**集団教育にフロアタイム的関わりを挿入**することで、両者の利点を活かすことが可能です³⁹⁴⁰。

また**カリキュラムの構造**にも違いがあります。モンテッソーリ教育には発達に合わせ用意された教具・課題があり、教師は環境を整える役割を担います。一方フロアタイムには決まった教材は無く、子どものその時々興味対象が「教材」となります⁸。レッジョは環境と記録（ドキュメンテーション）を重視し、子どもの発言や作品を丁寧に記録してカリキュラムに反映しますが、フロアタイムは**子どもの内面世界への即興的な働きかけ**が中心で、細かな記録よりもリアルタイムの情緒的対応を優先します⁵²。このためフロアタイムは科学的証拠集め（データ収集）が難しく「証明しにくい」という指摘が以前からありますが⁵²、その分、子どもの心の動きに即座に寄り添える柔軟性があります。

さらに**目的の違い**も考慮が必要です。オルタナティブ教育は基本的に全ての子供の最適な発達を図る普遍的教育哲学ですが、DIR/フロアタイムはとりわけASD等で「人との関わりに困難さを抱える子が社会・学習に参加できるようにする」というリハビリテーションの要素が強い側面があります。そのため、例えばモンテッソーリ教師が通常児童と同じように発達障害児にも自発性に任せているだけではうまくいかない場合、**フロアタイムという明確な指針を取り入れることで適切な支援バランスが取れる**といった指摘があります⁵³。実際、モンテッソーリ園でASD児が孤立してしまうケースに対し、「無理に集団に順応させようとする（正常化の要求）か、その子の世界に任せ放置するか」という両極端に陥りがちなところを、フロアタイムの手法が**子ども中心でありながら計画的に関与する中庸の道を提供してくれる**という報告もあります⁵⁴。このようにDIR/フロアタイムはオルタナティブ教育の思想と深く共鳴しつつ、特別な支援を必要とする子どもたちへの具体的アプローチを補完的に提供できる点で、教育全体に与える影響も大きいと言えます。

教育者が活用できる具体的戦略と支援方法

学校現場の教育者がDIR/フロアタイムの考えを取り入れてASD児童を支援する際に、有効とされる具体的な戦略を以下にまとめます。

- ・**子どもの興味を起点に関わる：** 授業や活動の中で児童が強い興味を示す対象・テーマを見つけ、それを糸口に対話や学びに発展させます。例えば自動車が好きな子には算数の問題に車の絵を用いる、自由時間にその子がレゴブロックで遊んでいたら教師も一緒にブロック遊びに参加してコミュニケーションの輪を広げるなど、「**子どもの世界に大人が入っていく**」姿勢を持ちます⁷。興味を共有することで子どもは安心感と関心を持ち、対人的なやり取りへの意欲が高まります。
- ・**情緒的なつながりを優先する：** 問題行動が起きたときも頭ごなしの指導より、まず子どもの気持ちや意図を汲み取るよう努めます⁵⁵。例えば友達に飛びついてしまう子には「○○君に早く会えて嬉しかったんだね。でもびっくりしちゃったみたいだよ」と共感しつつ伝えるなど、**行動の裏の感情に着目して応答**することが大切です⁵⁵⁵⁶。これはフロアタイムの「子どもの行為は何らかの理由や発達上のニーズから来ている」という視点で、罰や叱責ではなくガイドや共感を通じて行動を導きます⁵⁵。
- ・**コミュニケーションの往復（円）を増やす：** 日々の教室での対話ややり取りを意識的に増やし、子どもが「**やりとりのキャッチボール**」を何度も経験できるようにします⁷。例えば発話が難しい子でも、ジェスチャーや視線でやり取りを続けられるよう教師がタイミングを合わせて反応するなど、言葉以外も含め**双方向のコミュニケーションの輪を途切れさせない工夫**をします⁷。一問一答で終わ

らず、「そうなんだ！それでどうしたの？」とさらに返しを促すことで対話を深め、社会的なやり取りのスキルを養います。

- ・**感覚ニーズへの配慮:** ASD児童はしばしば感覚過敏・鈍麻や特定の感覚刺激への強い欲求を伴います。教師は各児童の**感覚プロフィール**（聴覚過敏がある、体を動かすと落ち着く等）を把握し、環境調整や感覚入力を活用します⁵⁷。例えば着席が苦手な子にはクッションや揺れる椅子を用意する、朝の会で多動になりがちな子には**重めのリュックサックを背負わせて参加させる**（身体感覚を落ち着かせるプロプライオセプションの活用）といった対応です⁵⁸。また教室への移行時に走り出してしまう子には、一緒に後ろ向きで歩いてみるなど**感覚遊びに変換**してエネルギーを発散させる工夫も有効だと報告されています⁵⁸。
- ・**肯定的な指示と言語化:** 問題行動を止める際、「〇〇しないで」ではなく「こうしよう」と子どもに取ってほしい行動を肯定形で示します⁵⁶。例えば友達を叩いてしまう子には「手はお膝。こんには言葉で言おうね」と具体的な代替行動を伝えます。また視覚的に理解を助ける**ソーシャルストーリー（社会的物語）**を用い、「登校したら：お母さんとバイバイする→先生におはようと言う→席に座る」と絵や写真で手順を示すことで見通しを持たせます⁵⁹。これらにより子どもは何をすべきか安心して理解でき、パニックや混乱を予防できます。
- ・**保護者・専門家との連携:** 教師だけで抱え込まず、保護者や療法士（言語聴覚士・作業療法士など）と積極的に情報共有し共同戦線を張ります⁴⁹。家での様子や有効な対応法、逆に苦手な刺激などを保護者から聞き取り、学校で活かします。必要に応じて専門家にクラスに入ってもらい助言を得るなど、**チームアプローチ**で一貫した支援を提供します⁴⁹。フロアタイムの観点では環境の一貫性・安定性が子どもの安心感につながるため、家庭と学校が連携して同じ方針で子どもに接することが望ましいとされています。
- ・**教員の専門性向上:** 継続的にDIR/フロアタイムや関連する発達支援について教員研修や勉強会を行い、知識とスキルをアップデートします⁴⁹。ASD支援は進歩が早いので最新の研究や事例に触れる機会を設け、学んだことを教師間で共有します。またICDLなどが提供する認定コース受講や、認定フロアタイムプロバイダーからのコンサルテーションを受けることも有益です⁴²²⁵。教師自身がフロアタイムの**実践的スキル**（子どもの注意深い観察、情緒的メッセージの読み取り、適切なタイミングでの介入など）を磨くことで、支援の質が向上します。

以上のような戦略を通じて、教育者は教室にしながら「いつでもどこでもフロアタイム」の精神でASD児童を支援できます⁶⁰⁶¹。大切なのは子どものありのままを受け入れつつ、その発達のニーズに即した関わりを継続することです。その結果、クラス全体に思いやりと多様性を認め合う風土が醸成され、ASD児童のみならず他の児童にとっても安心して学べるインクルーシブな学習環境が育まれるでしょう⁴¹。DIR/フロアタイムに裏打ちされたオルタナティブな視点は、21世紀の教育現場において**一人ひとりの「ポテンシャル（可能性）を伸ばす教育」**への示唆を与えてくれると言えるでしょう⁶²。

出典:

※ 本回答ではアメリカの公式教育機関（ICDL等）や大学、専門機関の情報を中心に参照しています。⁵
⁷ ² などの参照箇所は、ICDL公式サイト、Autism Speaks、米国の公開記事等の信頼できる情報源に基づいています。各引用文献の詳細は該当箇所の末尾に示した番号付きブラケット【】内に記載されています。

2 15 16 18 22 23 29 30 37 **The Benefits, Drawbacks and Challenges of a DIR Floortime Model for Children With Autism - UVM Professional and Continuing Education**
<https://learn.uvm.edu/news/dir-floortime-model/>

7 10 11 12 13 24 25 62 **Floortime | Autism Speaks**
<https://www.autismspeaks.org/dir-floortime>

8 9 19 52 **Floortime and Pivotal Response Training**
https://www.kennedykrieger.org/stories/interactive-autism-network-ian/floortime_and_prt

14 **Age Range Considerations in DIR Floortime Therapy**
<https://www.wonderfulplay.com/blog/age-range-considerations-in-dir-floortime-therapy>

17 20 21 **Home of DIRFloortime® (Floortime) - DIR® Research**
<https://www.icdl.com/research>

26 27 28 31 32 33 34 35 36 42 **Home of DIRFloortime® (Floortime) - DIR 320: DIR in Schools**
<https://www.icdl.com/courses/320>

38 39 40 41 49 57 **Inclusive Education: Supporting All Children with Floortime**
<https://www.achievingstarstherapy.com/blog/inclusive-education-supporting-all-children-with-floortime>

43 **A DIR® Lens on Sleeping | Affect Autism: We chose play**
<https://affectautism.com/2024/06/21/sleep/>

44 45 46 47 48 53 54 **Floortime and Montessori – Montessori Commons**
<https://montessoricommons.cc/floortime-and-montessori/>

55 56 58 59 **Floortime Tips for Behavioural Challenges at School | Affect Autism: We chose play**
<https://affectautism.com/2018/10/22/floortime-tips/>

60 61 **Integrating Floortime Therapy in Schools**
<https://www.achievingstarstherapy.com/blog/integrating-floortime-therapy-in-schools>